

制度反対へ団体始動

裁判員時代

市民が刑事裁判に参加する裁判員制度。09年の開始に向けて裁判員の選
び方や有罪無罪を決める評議の進め方などが次々と具体化していくなか、
導入そのものに反対する団体が活動を始めている。「中身が明らかにな
り、市民にも知れわたって来た今こそ、反対の声を結集させたい」。メン
バーは制度の廃止を目指して動きを強めるといふ。(岩田清隆)

29日夜、東京都内で開かれた
集会。主催した団体「裁判員制
度はいらない！大運動」の呼び
かけ人の一人、作家の嵐山光三
郎さんは「敏感な世論の一人と
して来ました」「裁判員制度は国
民の徴兵制度のようなもの。や
りたくないが、もし選ばれたら
(評議内容の守秘義務を破っ
て)書きまますよ」と語った。
団体が発足したのは4月。裁
判員になることを拒否できな
い。評議の内容は秘密にしま
なければならない。被告も短い審

「徴兵のようなもの」「自由がいい」 嵐山光三郎さんら、東京で集会

理期間では十分に反論できない
だろう。被害者の刑事裁判への
参加も導入されれば量刑はずつ
と重くなるのではないか。そん
な問題意識を持ったメンバーが
集まった。

この日の集会で、350人の
参加者を前に上演されたのは、
演出家の印南真人さんが手がけ
た模擬裁判劇「美しい国の裁判
員時代」。極端な例も交えてメン
バーの懸念を凝縮した内容だ。
夫を殺害したとして逮捕・起
訴された妻の裁判。無罪を主張
する被告が「(有罪のように報
じた)ワイドショーや週刊誌を
見て頭がいっぱいになってる人
に裁判されるのはイヤ」と言っ
ても聞いてもらえない。評議の
内容を報道機関に話した裁判員
が逮捕される――。

劇の後、同じく呼びかけ人の
漫画家・蛭子能収さんは「赤紙
みたいなのが突然来て拒否でき
ないんですよ。私は行きたくな
い。自由がいいんですよ。嫌々
行っただとしても『早く終わるな
ら、皆さんが言われる通りの刑
がいいです』と言います」と話
した。

団体では劇の様子をDVDで
上映するなど、同様の集会を全
国で開いていく予定。廃止を求
める署名を集め、国会に請願を
出すことも考えているという。



集会に参加した嵐山光三郎さん(左)、
漫画家の蛭子能収さん(右)29日、東京都
新宿区で、筋野健太撮影